

## 職業におけるジェンダーの悩ましき

岩田 三代

「バイト先で働いているのはすべて女性。男性が面接を受けても雇われたことはない。店長はスイーツの店だから女性のほうがおいしそうに見えると言っていたけど、これって男性差別では？」。私が教えている大学の学生のコメントペーパーにこんな「告発」があった。和菓子職人やパティシエには男性も多いから、スイーツ業界は女の職場とは言えないが、伝統的に男の職場、女の職場とされてきた職種にはジェンダー（社会的・文化的性差）によるイメージが染みついており、男女雇用機会均等法の施行から30年経った今も性別による偏りは是正されていない。

1999年には「保母」が「保育士」に、2002年には「看護婦」が「看護師」に呼び名が変わり、男性も就く職業だと認知された。男性の保育士や看護師の活躍がマスコミで報じられる機会も増えている。だが、両職種ともいまだに全体の9割以上が女性だ。「スチュワーデス」が「キャビンアテンダント」に変わった飛行機の客室乗務員も、日本の場合は圧倒的多数が女性であることに変わりはない。

職業の領域で刷り込まれたジェンダーは根強い。そうした中で「男性保育士に娘の着替えや排せつの世話をやってほしくない」との発言が波紋を広げていた。単純明快に言うなら「彼らは専門職なのだから職務能力が同じなら男女差別はあってはならない」だろう。父親がもっと育児に参加し、乳児のおむつを替えている姿が当たり前になればこうした抵抗感はなくなるかもしれない。だが一方で、男女（あるいは個人）に生物学的な差があるのは事実。身体的な接触は、性犯罪や個人の羞恥心の問題とも関わるだけにそれほど単純でないとも言える。たとえば「異性に着替えや排せつの介助をしてほしくない」というお年寄りがいた場合、それを一切考慮せず「プロだから」との言いふんで通していいのか。実際には人手不足でそんなことを言っていられないのが実情だろうが、職業分野の男女平等を進めつつ、さらに議論が必要だろう。



### PROFILE

いわたみよ：ジャーナリスト。元日本経済新聞論説・編集委員。1952年愛媛県生まれ。愛媛大学法学部卒。日本経済新聞社で女性労働、家族問題、消費者問題など幅広く取材。2015年に同社退職。現在、フリージャーナリストとして活動するかたわら実践女子大学、東京家政大学で非常勤講師（ジェンダー論）を務める。独立行政法人国民生活センター非常勤監事。